Nagoya University Psychological Support &
Research Center for Human Development
http://kokoro.nagoya-u.ac.jp/

名古屋大学心の発達支援
研究実践センターニュース

No. 8 2016年度

編集／発行
名古屋大学心の発達支援研究実践センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町　TEL:052-789-2658

KOKORO

特集

心の発達支援シリーズ

本シリーズは、乳幼児から青年期まで「発達が気になる」子どもを抱える保護者や学校の先生が、発達段階ごとに子どもの課題を客観的に理解し、適切な支援を考えることに役立つ全6冊から成るシリーズです。

近年、発達障害圏と診断される子どもに限らず、担任が「発達が気になる」とスクールカウンセラーに相談したり、保護者が気になってクリニックを受診するケースが急増しています。担任は対応の困難さ、保護者はしつけや子育ての悩みなど、さまざまな場面で周囲の大人も多くの問題を抱えている現状にあります。また、子どもたち自身も、学級になじめず、いじめや友人関係のトラブルなどから、二次障害の問題を抱えることも少なくありません。

わが国における特別支援教育制度発足当時（平成17年）の児童生徒は、現在では大学生や社会人に成長しています。この間に、小中高校にとどまらず、大学における発達障害学生支援や、成人の発達障害者支援など、発達障害をめぐる問題は社会全体が取り組まねばならない課題となってきているのが現状と思われます。

本シリーズは、生涯発達の視点で、乳幼児期の早期発見に始まり青年期まで発達段階に沿って、心と学習支援の両面について事例を掲載しながらわかりやすく解説しています。具体的には、以下の点を特徴としています。

1. 「発達障害」という診断名にかかわらず、先生や保護者にとって「発達が気になる」子どもに対するかかわりや支援の視点で構成。
2. 乳幼児期から大学生まで発達の視点にそって各段階におけるかかわりや支援の方法を具体的に解説。
3. 3巻（小学生）と5巻（中学生・高校生）では、学習支援の方法についても解説。
4. 6巻（大学生）では、大学生活、学習面および就労支援まで広く、具体的な事例に沿って、支援の方法を解説。

編著者は、名古屋大学心の発達支援研究実践センター教員です。また2巻（幼児期）、3巻（小学生）、5巻（中・高校生）には、本センターの発達障害支援プロジェクトによる研究成果も盛り込まれています。

本書が「発達が気になる子どもたち」に日々寄り添い、かかわり、支援している学校の先生、保護者や専門家にとって新たな道標となり、子どもたちの健やかな成長に少しでも貢献できることを願っています。

特集　心の発達支援シリーズ

第1巻　乳幼児　　永田雅子 著

「育ちが気になる子を支える」

乳幼児期は、子どもの発達のペースの個人差が大きく、急速に子どもも伸びていく時期です。また、多くの人の手を借りながら育てていくことが必要な時期でもあります。人の成長にとって一番土台となる、大事な他者との関係性を築いていくことを支援していくことが可能な時期であり、発達が急速に伸びてくる時期だからこそ、支援の効果も表れやすい時期です。一方で、子どもの発達に不安を感じていたり、かかわり方がわからず悩んだり戸惑っていたりしても、自分の子育てを評価されるのではないかと不安に思ってサポートにつながりにくかったり、成長にともなって子どもが変化をするのではないかと期待し、“様子をみましょう”と具体的なかかわり方についてのヒントが手に入らないまま過ぎていくことも少なくありません。この本では、乳幼児期に親や周囲の大人たちが気になったり、対応に戸惑ったりするだろう子どもの姿や行動・反応など丁寧に取り上げ、その謎解きを提示しています。0歳～3歳ごろまでの発達段階にあわせて”興味の共有が少ない”“偏食が多い”“他の子に手が出る”など、気になる子どもの反応や行動について細かく解説し、具体的な対応についてのヒントが書かれています。そのほか、乳幼児期に利用できる支援の場の紹介や、事例を通した支援の実際についてわかりやすく解説しており、子どもの育ちが気になる保護者や、子育て支援の場で活動をしている人にとって必読の書となっています。

第2巻　幼稚園・保育園児　　野邑健二 編著

「集団活動で気になる子どもを支える」

第2巻では、幼稚園・保育園での集団生活で気になる子どもを支えるために必要な支援について書かれています。

幼児期後期（4、5、6歳児）の最も大きな変化は、幼稚園・保育園への就園です。家の中の生活が中心で常に親と一緒に過ごしていたのが、親の手を離れて集団生活を行う中で、世界の拡がりと飛躍的な成長が見られる年代です。一方で、発達障害の子どもには生来の発達の偏りがあるとされていますが、実際には、集団に入っていくこの時期に、人とのかかわり、集団行動、気持ちのコントロールなどの問題が顕在化し、不適応が明らかになることもしばしば認められます。

この時期は、学校という大きな集団に入るための準備の時期でもあります。発達に偏りがある子どもに限らず、すべての子どもにとって、この時期をどう過ごし、就学に向けてどういう支援が行われたかが、その後の育ちに大きな影響を与えます。

本書では、幼児期後期の発達と小学校入学に向けた課題を明確にした上で、子どもの健やかな成長を支えるために、幼稚園・保育園で気になる問題の背景とかかわり方について、事例を交えて具体的に解説しています。

幼稚園･保育園の先生、療育や相談を行っている先生、心理士、幼児期の子どもを迎え入れる小学校の先生、そして子どもの最大の支援者である保護者など、幼児期の子どもを支える方々がより良い支援やかかわりができることを目指しています。

第3巻　小学生　　福元理英 編著

「学習が気になる子どもを支える」

特別支援教育の展開にともない、学校現場におけるLD（学習障害）、注意欠如・多動症（注意欠如・多動障害：ADHD）、自閉スペクトラム症（自閉症・アスペルガー障害など：ASD）などの発達障害児に対する学習指導の充実は、重要な課題となっています。しかし学校現場においては、児童一人ひとりの学習習得度や認知特性を丁寧に把握することは難しく、それが個々の児童のニーズに沿った学習指導計画を立てることの難しさにも結びついているといえます。さらに、医療機関における知能検査などを通して、児童の認知的特徴や得意不得意が把握できたとしても、その内容を実際の教科学習指導に反映させることは難しく、担任の先生方は対応に苦慮しているといえるでしょう。

本書では、小学生児童の保護者・教員を対象とした学習支援の手引きとして、児童の学習におけるつまずきがどのような要因から起こっているのかを解説し、今後の支援の方向性について具体的に提示することをめざしています。本書が、学習困難を抱える子どもを支えている先生方や専門家の皆様および保護者の皆様にとって、支援を考えていく一助となれば幸いです。

第4巻 小学生・中学生　　松本真理子・永田雅子 編著

「情緒と自己理解の育ちを支える」

「発達が気になる子ども」の中でも、発達障害圏とされる子どもは生来的な発達上の特徴から、集団不適応、友人関係のできにくさ、あるいは、家庭や学校での失敗に対する叱責、非難など、多くの否定的な体験を重ねていることが多いものです。その結果、不登校、いじめ、抑うつ状態やひきこもりなどさまざまな不適応の状態に陥る、いわゆる二次障害をかかえる子どもも珍しくありません。こうした二次障害やそれに伴って否定的な自己イメージを抱えたまま成長し、その結果、将来の社会生活に支障をきたす場合も少なくないのが現状です。心理相談室で出会う子どもたちの多くは、多かれ少なかれ情緒的問題や「自分はダメだ」「他の子と同じようにできない」などの自己イメージの不全さをかかえ、深刻な場合には「生きていても仕方がない」と思い込む場合もあります。生涯発達の点からも、こうした二次的問題の予防や早期の支援は大変に重要な課題です。

本巻では、児童思春期の自己イメージを含む心の発達を概説した上で、「気になる問題」の背景とかかわり方について事例を交えて具体的に解説しています。

第5巻 中学生・高校生　　酒井貴庸 編著

「学習・行動が気になる生徒を支える」

特別支援教育が開始されてから10年が経とうとしています。特別支援教育に関する研究や医療・福祉・教育の現場における専門家の実践が行われていますが、依然としてこの分野における課題は少なくないのではないでしょうか。先日、「発達障害の専門的な知識が不足している」と書かれた記事を目にしました。それぞれの現場で専門性を発揮しながら活躍されている教員や職員がたくさんいらっしゃることは確かですが、各現場における教職員全員が同様の知識や技能を共有することは大変難しく、なにか問題が起こってしまうと、批判的に捉えられてしまうことは避け難いのかもしれません。

本書は、中学・高校における特別支援教育を行う上で必要不可欠な事柄を、より多くの教職員が共有し、実践できるよう、具体的な実践例も含めた構成になっています。1章では、中学・高校生にあたる思春期の課題について概説した上で、発達障害の傾向に起因する生活適応上の困難についてまとめています。2章では、教師や保護者が気になる子どもの問題に対応していくために必要となるアセスメントと支援の要点を整理しています。3章では、学習と進学・就労といった進路に焦点をあて、実践例を用いて解説しています。4章では、中学生と高校生の事例を通して、実践での取り組みを紹介しています。そして、5章では、支援者育成のための効果的な研修プログラムの内容をまとめています。

第6巻 大学生　　鈴木健一・安田道子 編著

「大学生活の適応が気になる学生を支える」

第6巻は、「大学生活の適応が気になる学生を支える」というタイトルで、学生相談や大学教育に携わっている13名の専門家によって執筆されました。編著者は、本センター名誉教授の安田道子先生と私が担当をしています。本書では、全体を通して、発達にばらつきのある大学生がキャンパスライフで直面するであろう困難が、具体的、かつ、わかりやすく解説されています。

第一章では、青年期の発達と、発達が気になる大学生の抱える問題と見立てについて論じています。また、入学前から発達障害と診断されている場合には、大学合格が決まり次第、大学の相談窓口に連絡をして、新生活への対応を考えておくことが重要であると指摘されています。

第二章では、入学期、中間期、卒業期といった学生生活ライフサイクルの各期において直面する彼らのつまずきを、21の架空事例を用いながら描き出しています。理解し難い彼らの言動にも根拠がある。それをわかりやすく解説しながら、支援の方法を提案しています。

第三章では、カウンセラーと出会い、カウンセリングを受けながら、大学生活に適応し、卒業し、就職していった3事例が紹介されています。

このような専門書が対象とする読者層は、これまでは、学生相談に携わる専門家や大学教職員が多数でした。本書では、これから大学へ進学する生徒やその保護者、学校の教師を対象としましたので、よりわかりやすい内容になっています。周囲の専門家たちからも「読みやすい」「わかりやすい」という評判を伝え聞いています。

国際共同研究

モンゴル国における発達障害児支援研究

「名古屋大学モンゴル国立教育大学 子ども発達共同支援センター」開設

2016年9月、モンゴル国における子どもの発達に関する相談と研究および支援人材の育成を行うセンターが、モンゴル国立教育大学に開設されました。このセンターは、名古屋大学とモンゴル国立教育大学が2013年より行っている「モンゴル国における発達障害児支援研究」の一環として開設されたものです。

2016年9月29日に、開設式が行われ、両大学関係者、モンゴルの教育、行政、発達支援関係者など約50名の参加がありました。式典では、タミルモンゴル国立教育大学副学長、金井篤子本学心の発達支援研究実践センター長などの挨拶の後、モンゴル教育大学学生による馬頭琴の演奏が行われました。当日の様子は現地マスコミに加えて、NHK でも報道されました。

センターの運営は、モンゴル国立教育大学教員養成学部の教員を中心としたモンゴル側スタッフと、名古屋大学心の発達支援研究実践センターの教員（臨床心理士・児童精神科医師）が協力して行っています。

センターの活動内容は、大きく以下の4つに分けられます。

（1）モンゴル国の子どもの発達やこころの問題に関する相談活動

センターには、相談室およびプレイルームがあり、実際に発達やこころの問題に心配を持つ子どもとその家族への相談活動を行っています。相談活動は、名古屋大学スタッフがモンゴルを訪問して協働で実施しています。こうした相談活動を通じて、モンゴル国の子どもの発達やこころの問題を支援する専門家育成を行っています。

（2）モンゴル国における子どもの発達を評価するツールの開発

子どもの発達を支援するためには、発達状況を正確に知ることが必要ですが、同国には子どもの発達を評価するツールがありません。我々は、日本で広く利用されている田中ビネー知能検査V

のモンゴル版開発を行っています。

2017年1月には、モンゴル教育大学の心理学や教育学を専門とする教員7名が訪日し、名古屋大学において、検査開発に関する集中ミーティングを行いました。

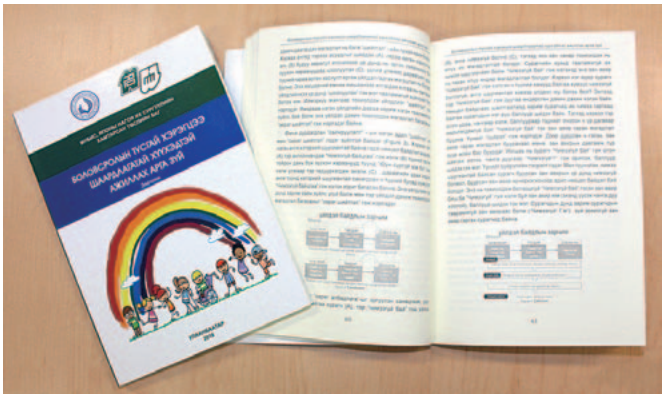
(3) モンゴル国における子どもの発達に関する共同研究の実施

モンゴル国における子どもの発達に関する問題を把握するために、調査研究を行っています。2015－16年に、モンゴル国の小・中学校教員を対象としたアンケート調査を行いました。その結果、モンゴル国においても、支援が必要と考えられる児童・生徒は数多く認められ、その中には、多動、集中力欠如、対人トラブルなどの発達障害特性と関連すると思われる問題が含まれていることがわかってきました。今後、支援が必要な児童・生徒がどのくらいいて、どういった支援が必要であるのかなどを調査することを検討しています。

(4) モンゴル国における発達障害や子どものこころの問題に関する専門家養成・啓発活動

2016年11月3－4日に、学校教員等を対象とした研修会を行いまいた。全国から約150名の参加があり、熱心に聴講して下さっている様子が印象的でした。

研修会に合わせて、子どもの発達支援者向けの専門書を発刊しました。これはモンゴル教育大学と名古屋大学のスタッフが協働で執筆したもので、発達に支援が必要な子どもに対する発見・支援に関する実践的な内容が書かれているものです。



今後の予定

2017年6月にセンター開設記念式典およびシンポジウムを開催します。その際には、モンゴル国の学校教員約150名を対象とした研修会を併せて開催する予定です。

公開講演　心の発達支援研究実践センター　主催

心の発達支援研究実践センターに客員准教授として、イタリア・ボローニャ大学の Elisabetta Crocetti 先生を招聘しました。クロチェッティー先生の専門は、青年期および成人形成期のアイデンティティー形成です。クロチェッティー先生には、Psychology of Adolescence and Emerging adulthood というタイトルで、合計12回の集中講義を行って頂きました。

Psychology of Adolescence and Emerging adulthood

客員准教授　Elisabetta Crocetti
ボローニャ大学（イタリア）

青年期と成人形成期の心理

講義では、成人形成期の理論、アイデンティティーと問題行動、アイディンティティーの社会的文脈、青年期と成人形成期の比較文化的視点など、青年期及び成人形成期の重要テーマについて、先生ご自身の最新の研究結果を基に行われました。また、他にも、青年期と成人形成期の研究手法として、縦断的手法、比較文化的手法、メタ分析手法などが取り上げられました。さらには、クロチェッティー先生は、若手でありながら、これまでに査読つき国際誌へ多数の優れた論文を発表していることから、国際誌への研究成果の発表方法について、アカデミックライティングと投稿及び査読システムについても、取り扱って頂きました。授業では、その分野の古典的研究の紹介から始まり、最新の研究成果を織り交ぜながら、体系的系統的に講義を行って頂きました。後半の研究手法やアカデミックライティングでは、大学院生達が実際に感じている研究活動での具体的な不安や悩みについて、真摯に取り上げて頂きました。授業を受講していた大学院生達は、世界的に活躍している若手の新進気鋭の研究者に出会ったことで、大いに刺激を受けていました。講義の最後には、学生達自身が英語のプレゼンテーションを行い、クロチェッティー先生からアドバイスを受けていました。

以前に比べて大学院生達の中には、積極的に海外で研鑽を積み、自らの研究成果を評価の高い国際誌に発表しようと果敢に挑戦する者が多くなってきました。今後は、ますます海外の研究者と交流を深め、日本からの研究成果の発信がこれまで以上に増えることが期待されています。

8月9日（日）に、本学教育学部大講義室において、黒田美保先生（名古屋学芸大学ヒューマンケア学部）のご講演「乳幼児期の発達障害の包括的アセスメントと支援」があり、臨床心理士や関連する大学院生等100名を超える参加者がありました。

乳幼児期の発達障害の包括的アセスメントと支援

教授　黒田美保
（名古屋学芸大学）

ご講演では、エビデンス・ベースド・プラクティス（根拠に基づく実践）の考え方をもとに、発見→評価（アセスメント）→支援の流れを、最新の実践理論をもとに丁寧にお教えいただきました。乳幼児期の発見に用いられている M-CHAT（Modifier Checklist for Autism in Toddlers）については、具体的に行動観察のポイントや保護者へのフィードバックの方法などもお話しいただき、すぐにでも我々の臨床に役立つように感じました。国際的に評価の高い自閉スペクトラム症の診断方法である ADOS-2（The Autism Diagnostic Obseration Schedule 2）については、開発の経緯や実際の使用方法なども含めてお話がありました。そして、包括的アセスメントの観点から、知的評価、診断とともに適応行動についても評価することが必要であると述べられ、Vineland Ⅱ（Vineland Adaptive Behavior Scale Ⅱ）についても解説いただきました。最後に実際の事例を通して、包括的なアセスメントから個別的な支援プランを立てる流れについて教えていただきました。

最後に、先生が最近取り組まれているコミュニティーベースの早期支援方法である JASPER (Joint Attention, Symbolic Play, Engagement, & Regulation) について、ご紹介いただきました。地域の保育園等で実施でき、子どもの共同注意を促進して、遊びの多様性を発達させると同時に相互的な関わりをはぐくむことを目指しているそうです。

最新の評価・支援方法について、とてもわかりやすく、実際の臨床実践に生かせるようなお話でした。

子どものレジリエンスを新生児期の支援から考える

平成28年9月18日（日）、野依学術交流記念館において、国際公開講座「子どものレジリエンスを新生児期の支援から考える」を開催しました。早期の家族支援の介入方法として着目されているNBO（Neonatal Behavior Observation：新生児行動観察システム）について海外から第一線でご活躍の先生をお招きし、日本を含めた世界各国での取り組みについて報告をいただきました。NBOは、ブラゼルトン新生児行動評価（NBAS）を土台にして、家族支援に特化して開発をされたもので、家族と赤ちゃんの強みを引き出すことで、養育行動の促進につながることが実証されてきています。NBOの開発者であるK.Nugent氏（米）は、「新生児期の介入のポイントについて」をテーマに、新生児と家族に対するNBOを使った実際の介入についてビデオを通して講演され、個性をもって生まれてきた赤ちゃんの反応を引き出すコツや、赤ちゃんの姿を家族と共有することの意味を分かりやすく伝えられました。次に、産後うつや低出生体重児の親子関係の早期介入にNBOを実践的に取り入れられているP.Cambell氏（豪）が「トラウマを受けた子どもと親へのかかわり」と題して、リスクを抱えた家族に対する介入について事例をまじえながら講演されました。最後に、当センターの永田雅子教授が、日本における周産期からの支援の現状と課題からNBOの応用可能性について講演を行いました。当日は、93名の参加があり、心理専門職だけではなく、助産師、保健師、保育士、理学療法士など多職種が集い、それぞれの立場からみた早期支援の在り方について活発な討論が行われました。

平成28年12月11日に、名古屋大学において、大六一志先生のご講演「つまずきの原因の理解と対応　―WISC-Ⅳと実践の橋渡し―」が行われ、定員を超える約80名の参加がありました。

つまずきの原因の理解と対応 ―WISC-Ⅳと実践の橋渡し―

大六一志先生

大六先生は、2016年春まで筑波大学教授を務められながら、WISC-Ⅳ知能検査開発の中心的役割を果たされていらっしゃいました。今年に入ってからは、以前にも増して、WISC-Ⅳの理解を向上させるための研修を全国各地で精力的に行っていらっしゃいます。

今回のレクチャーでは、WISC-Ⅳの理論的根拠から始まり、プロフィールの詳細な読み取りと見立て、それを生かした支援方法について、丁寧な講義がありました。加えて、自閉スペクトラム症や発達障害のある児童における検査の解釈と支援についても言及され、事例を用いた検査結果の読み取りやレポートの書き方に至るまで、非常に多岐にわたる内容でした。お話を伺う中で、検査の理論と解釈、支援が互いにつながりを持って理解することが大切であると感じられました。大学院生から実戦経験豊富なベテランまで、臨床心理士を中心に多数の参加者がとても熱心に聴講している姿が印象的でした。

新任教員・研究員の紹介

准教授

五十嵐哲也

2016年4月に着任した五十嵐哲也です。専門は学校心理学で、スクールカウンセリングの場で子ども、保護者、先生方と向き合ってきました。

私が、学校を主たるフィールドにしたいと考えるようになったのは、ある先生との出会いが関わっています。その先生は、私が心理学を学びながら関わっていた学校の養護教諭で、「誰が」「どこで」「どのように」動くことが、目の前の子どものためになるのか、そのために自分はどう動くべきかを常に考え、実践している先生でした。例えば、保健室に頻回来室する子がいたら、私が保健室に行っても不自然ではない用事を作り出してくれて、自然な形で私がその子と顔を合わせる機会を設けてくれました。また、学級経営で行き詰まりを感じている先生がいた際には、私と職員室で雑談をすることにして、その悩んでいる先生を雑談に巻き込んで話を聞く機会を作っていました。こうした支援を目の当たりにして、私は、学校のもつ力の大きさを実感させられました。そして、どうすればその力を存分に生かした支援を実践することができるのか、という点に関心をもつに至りました。

このことは、私の主たる研究テーマである「不登校の予防的支援」を検討する上でも、必要な視点になっています。これまでの検討によって、学校に行きたくない気持ちを減らすためには、対人コミュニケーションなどのいわゆる「心理的な側面」の苦手さだけではなく、提示された課題をこなすといった「学習に関する側面」や、自分の健康に留意して生活するといった「健康に関する側面」も関わっていることがわかりました。これらは、教育相談担当教員やスクールカウンセラーだけではなく、担任や養護教諭などの多職種が協同して取り組む必要性を示しています。学校心理学は、こうした学校での支援の実践と、それらの理論的基盤となる研究に対して一定の枠組みを与え、その発展を支えています。まだまだ新しい分野である日本の学校心理学をどのように深めていくことができるのか、自身の学校での臨床を振り返ることをヒントにしながら考えていきたいと思います。

研究員

若林紀乃

このたび、2016年7月に研究員として着任いたしました、若林紀乃です。専門は発達心理学・保育学です。といいましても、私のこれまでは“学”といえるほどその専門を自ら追究できたわけではなく、むしろ多くの子どもたち、そして子どもたちと共に日々奮闘する保育者から沢山のことを学ぶ日々でした。

もともと、『思いやりの表現が不器用になってしまう子どもたち』を縦断的に観察研究していた私は、院生時代その多くの時間を保育現場で過ごしました。カメラを片手に毎日保育園にいる私を、子どもたちはいつしか“カメラマン先生”と呼んでくれるようになりました。ある保育者から「年中クラスのR君のトラブルが多いからよく観察してほしい」と話があったのは、“カメラマン先生”が園児たちに定着した頃でした。

R君は丁寧に観察をすればするほど、彼の意志とは裏腹な結末をむかえてしまう男の子でした。例えば、折り紙の折り方がわからない友達を助けようと横から手を出し折ってしまい、「やめて！」と怒られケンカになるという具合です。R君は多くを話さない子でしたので、ケンカ後に駆けつけていた保育者には優しい子というよりトラブルの多い子としてとらえられていたのです。依頼から数日後、R君の観察事例を何度も検討したカメラマン先生と保育者は、大人の子どもへの目線がいかに一側面に偏りがちであるかを痛感することとなりました。

私はその後院生時代と同じ地域で大学教員として就職し、保育者と共に子どもの姿を多角的にとらえるための保育カンファレンス研修を行なうようになりました。子どもの様々な姿に触れるこの研修は、『気になる』といわれる子や親の対応に迷い、変わりゆく保育現場に戸惑う保育者と私にとって、子どもの生活・教育に純粋に向き合うための大切な活力となっていたように思います。

働き手を増やすために子どもを取り巻く様々な制度が変わる中、多様な状況の中で育つ子どものための教育・支援とは何かを研究の中で日々悩みます。国を越えて障害のある子や配慮が必要な子たちに関わる仕事をさせて頂く今、子どもたちとその生活をとらえる私の目線があらためて問われているような気がしています。

活動報告

国際会議（International Conference）

「モンゴル国と日本の発達障害児支援および特別支援教育に関する共同研究の進展」

日　時：6月7日（火）
場　所：モンゴル国立教育大学
発表者：
モンゴル国立教育大学
D. Mandakh（Director, MNUE, Teacher’s School）
D. Odgerel (Lecturer, MNUE)
T. Enkhmaa (Lecturer, MNUE)
D. Oyunchimeg (Lecturer, MNUE)
D. Bayaraa (Director, Ui tsai school)
名古屋大学
野邑健二（心の発達支援研究実践センター・特任教授）
福元理英（心の発達支援研究実践センター・特任助教）
金子一史（心の発達支援研究実践センター・准教授）
酒井貴庸（大学院教育発達科学研究科・特任助教）

センター主催・共催研修会

テーマ：平成28年度特別支援教育コーディネーター養成研修会

日　時：〈高等学校〉7月22日（金）・7月29日（金）
〈小・中学校〉7月28日（木）・8月1日（月）
場　所：〈高等学校〉刈谷市産業振興センター
〈小・中学校〉TKP名古屋栄カンファレンスセンター

内　容：
「発達障害の理解」
野邑健二（名古屋大学心の発達支援研究実践センター・特任教授）
「アセスメント（査定）」「学習障害のある児童・生徒への支援」
福元理英（名古屋大学心の発達支援研究実践センター・特任助教）
「行動への支援Ⅰ」「行動への支援Ⅱ」
酒井貴庸（名古屋大学大学院教育発達科学研究科・特任助教）
〈高等学校〉「校内における配慮・支援の実践」
菊池信二氏（北海道幕別高等学校・進路指導部長）
〈小・中学校〉「通常学級で高まる特別支援教育」
安藤英吾氏（名古屋市立千鳥小学校・教諭）

公開レクチャー

テーマ：Psychology of Adolescence and Emerging adulthood
青年期から成人期の心理学

日　時：8月1日～4日
場　所：名古屋大学教育学部 E 演習室
講　師：ボローニャ大学　Ms. Crocetti, Elisabetta 先生

テーマ：乳幼児期の発達障害の包括的アセスメントと支援

日時：8月7日（日）15：00～17：00
場所：名古屋大学教育学部2階大講義室
講師：黒田美保　教授（名古屋学芸大学ヒューマンケア学部こどもケア学科）

テーマ：子どものレジリエンスを新生児期の支援から考える

日時：9月18日（日）13：30～17：00
場所：名古屋大学野依学術交流記念館
講師：
Dr. Nugent（米）
新生児期の介入ポイント（英語）
Director, Brazelton Institute, Boston Children's Hospital; Emeritus Professor, University of Massachusetts at Amherst Lecturer, Harvard Medical School.
Dr. Campbell（豪）
トラウマを受けた子どもと親への関わり（英語）
Associate Prof, NBO, Royal women's Hospital, Royal Children's
Hospital Melbourne, and the University of Melbourne.
永田雅子（日）
日本における周産期からのこころのケアの現状と課題
－ NBO の活用の可能性について－（日本語）
教授、名古屋大学　心の発達支援研究実践センター

モンゴル教員研修会

Strategies for teaching children with Special needs

日　時：11月3日（木）・4日（金）
場　所：モンゴル国立教育大学
講　師：
3日（木）
D. Odgerel (Lecturer, MNUE)
D. Erdenechuluun (Lecturer, MNUE)
D. Oyunchimeg (Lecturer, MNUE)
野邑健二（名古屋大学心の発達支援研究実践センター・特任教授）
永田雅子（名古屋大学心の発達支援研究実践センター・教授）
酒井貴庸（名古屋大学大学院教育発達科学研究科・特任助教）
4日（金）
D. Bayaraa (Director, Ui tsai school)
O. Munkhtsetseg (JICA "START" project, Curriculum manager, School No.63)
B. Enkhtsetseg (JICA "START" project, School No.25)
G. Byanbatseren
金子一史（名古屋大学心の発達支援研究実践センター・准教授）
福元理英（名古屋大学心の発達支援研究実践センター・特任助教）

テーマ：つまずきの原因の理解と対応
―WISC-Ⅳと実践の橋渡し―

日　時：12月11日（日）　9：30～17：00
場　所：名古屋大学 IB 電子情報館1階15講義室
講　師：大六一志　先生（元筑波大学教授・臨床心理士）

脳とこころの研究センタープログレスレポート会議

The Brain & Mind Research Center Progress Report Meeting

日　時：12月13日（火）18：15～19：45
場　所：名古屋大学・東山キャンパス・教育学部1階 第1講義室
【司会・コーディネーター】
大平 英樹 先生　名古屋大学大学院環境学研究科
Dr. Hideki Ohira (Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University)
金子 一史 先生　名古屋大学心の発達支援研究実践センター
Dr. Hitoshi Kaneko (Psychological Support and Research Center for Human Development, Nagoya University)
【発表】
1. 遠山 朝子 先生　名古屋大学大学院環境学研究科・日本学術振興会特別研究員 PD 文脈依存の価値―fMRI と自律神経系の同時計測、および計算論モデルを用いた研究―
"Context-dependent values: Studies using fMRI and computational modeling"
Dr. Asako Toyama (Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University; Japan Society for the Promotion of Science: JSPS)
2. 金子 一史 先生　名古屋大学心の発達支援研究実践センター
自傷行為といじめおよび学校での安心感との関連
"Association Between Bullying Behavior, School Safety, and Self-Cutting: A Japanese Population-Based School Survey"
Dr. Hitoshi Kaneko (Psychological Support and Research Center for Human Development, Nagoya University)

テーマ：文部科学省事業「発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業」の成果報告会および記念講演会「発達障害のある生徒への進路支援ー進学・就労に向けてー」

日　時：12月17日（土）　13：00～16：45
場　所：名古屋大学 IB 電子情報館　大講義室
内　容：
「発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業」成果報告
酒井貴庸（名古屋大学大学院教育発達科学研究科・特任助教）
「発達障害の方の就職支援」
榊原昌子氏（名古屋中公共職業安定所・若年求職者担当次長）
福崎守　氏（愛知労働局　職業対策課・課長補佐）
「学生相談からみた大学進学の課題」
鈴木健一（名古屋大学心の発達支援研究実践センター・教授）

2017年度 招聘教員

Andre Sourander（アンドレ　ソーランダー）教授
トゥルク大学（フィンランド）
研究テーマ：児童思春期のメンタルヘルス
招聘期間：2017年11月14日～12月16日
Campbell Paul(キャンベルポール) 准教授
メルボルン大学 (オーストラリア)
研究テーマ：出産直後からの家族―乳児の関係性支援
招聘期間：2018年1月頃

スタッフ紹介

■センター長

金井篤子
教授・産業臨床心理学・キャリア心理学
●研究テーマ：
・働く人のキャリアとメンタルヘルスに関する研究
・キャリアカウンセリング
・ワーク・ライフ・バランス

■こころの育ちと家族分野

永田雅子
教授・発達臨床心理学
●研究テーマ：
・周産期の母子臨床
・発達障害の臨床
・乳幼児精神保健

金子一史
准教授･発達臨床学、臨床心理学
●研究テーマ：
・産後うつ病および産後愛着障害への介入
・児童期のメンタルヘルスに関する日本とフィンランドとの国際比較研究

■こころと社会のつながり分野

松本真理子
教授・臨床心理学
●研究テーマ：
・子どものメンタルヘルス支援に関する国際比較と心理教育プログラム開発
・子どもの心理アセスメント

五十嵐哲也
准教授・学校心理学
●研究テーマ：
・不登校の予防的支援に関する研究
・学校環境と子どものマッチングに関する研究
・学校適応に関与する子ども自身の力に関する研究

■こころの支援実践分野

鈴木健一
教授・臨床心理学、精神分析
●研究テーマ：
・学生相談における対人関係精神分析の援用

杉岡正典
准教授・学生相談
●研究テーマ：
・大学生への心理的援助
・地域援助、コミュニティ心理学

■発達障害児支援研究プロジェクト

野邑健二
特任教授・児童精神医学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・乳幼児の発達支援
・発達障害児の家族のメンタルヘルス

福元理英
特任助教・臨床心理学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・特別支援教育における心理士の専門性についての検討

酒井貴庸
特任助教（教育発達科学研究科所属）・臨床心理学・応用行動分析学
●研究テーマ：
・特別支援教育に関する研究
・発達障害の障害特性に関する知識尺度に関する研究

若林紀乃
研究員・発達心理学、保育学
●研究テーマ：
・子どもの社会性の発達
・保育者・教育者の協働
・発達障害のある子の育ちと教育

KOKORO

名古屋大学心の発達支援研究実践センターニュース

NO.8・2016年度

●編集後記

今回の編集作業を通して、センターの活動が国内外と多岐にわたっていることを改めて感じました。国際共同研究では、モンゴル国立教育大学に子ども発達共同支援センターが開設されました。今後、ますますモンゴルとの共同研究が進展していくでしょう。

また、国内に向けては、心の発達支援シリーズ（全6巻）が刊行されました。このシリーズ本は、センターが長年取り組んできた子どもの発達支援に関する成果の1つであるとともに、支援現場とセンターのさらなる共同研究のスタートになると思われます。センターは「心の発達支援」をキーワードに今後もグローバルな視点から研究や支援を行ってきたいと考えています。今後ともセンターにご支援ご協力を頂きますようよろしくお願いいたします。

杉岡正典 准教授　記